



リサーレイヌール コレクションから

ラマダーン

サイド・ヌルシ

サイド・ヌルシ

ベディウツザマン・サイド・ヌルシー師は1878年、ビトゥリス県に属するヒザン郡ヌルス村で生まれました。子供時代には付近にあったマドラサ（オスマン時代の学校）で教育を受けました。その驚異的な知性と記憶力のため、最初は「モッラ・サイーディ・メシュフル」（高名な学者サイード）として知られていました。その後、「時代の驚異」という意味を持つ「ベディウツザマン」という称号で知られるようになりました。

学生時代には、基礎的なイスラームの知識に関する90冊の本を暗記していました。毎晩、それらのうちの一冊の暗記を再び行っていました。この繰り返しがアッラーを、ク

ルアーンの言葉を深く理解するための階段の一段一段となりました。そして彼はクルアーンの節の一つ一つが、世界の全てを包括していることを目にしていました

1900年代の初め、東部にマドラサトゥッズ - ゼフラという名の、イスラームと科学知識を共に教えるイスラーム大学を作るという構想と共に、統治やカリフ制の中心地であったイスタンブールにやってきます。そして生涯をかけてこの構想を現実化させるべく努力していました。今日、彼が望んだとおりの形の大学は作られてはいないとはいえ、世界の各地に広がった「知識の家」が開かれることで、ベディウッザマン師が構想を抱いていた「学びや」が異なる形で存在することとなりました。

第1次世界大戦では東部戦線で志願兵の連隊の司令官として奉仕を行いました。戦いの最中に負傷し、2年半の間ロシアで捕虜とされていました。1917年のボルシェビキ革命の際の騒乱により、虜囚生活から救われることができたのでした。帰還後、参謀長のはからいで、オスマン朝で最高レベルのイスラーム相談センターであった「ダール - ル ヒキメティ - ル イスラーミエ」で任務についていました。イギリスがイスタンブールを占領した際には、彼らに対する形で「フトウワトゥ・シッテ」（六つの歩み）という作品を発表しています。

またアナトリアで始まった独立闘争をも支援してしまし

た。

1925年、ワンで教育活動を行っていた際、当時起こったシャイフ・サイド運動により、この運動に反対していたのにも関わらず、予防措置としてまずブルドウルへ、そこからウスパルタへ、そしてバルラへと流刑にされました。ここには8年間いました。「リサーレイ・ヌール」（光の書簡集）と呼ばれるクルアーンの解釈書の多くの部分はここで書かれました。その作品や思想のため、1935年にはエスキシェヒルの裁判所に送られました。

彼は流刑囚として送られたカスタモヌでも、作品の執筆を続けていました。1943年にはデニズリ裁判所に、1948年にはアフヨン裁判所に送られました。これらの裁判では無罪判決が出されました。

1950年には多党制に移行したため、宗教上の権利や自由が広がりました。ベディウツザマン師はこの時代に、作品を出版社で印刷させています。

ベディウツザマン・サイド・ヌルシー師は1960年3月23日に、ウルファで亡くなっています。

ラマダーン

#9

(29番目の手紙)

ラマダーンについて

شَهْرُ رَمَضَانَ الَّذِي أُنْزِلَ فِيهِ الْقُرْآنُ
هُدًى لِّلنَّاسِ وَ بَيِّنَاتٍ مِّنَ الْهُدَى وَ
الْفُرْقَانِ

第1のポイント

神聖なるラマダーン月におけるサウム（齋戒、断食）はイスラームの5行のなかで最も重要なものの一つです。またサウムはイスラームの象徴のうち最大のものです

神聖なるラマダーンの断食には多くの英知があります。ジャーナブ・ハックのルブービーヤ（アッラーが被造物のすべてにそれが必要とするものを与え、導かれ、統治されること）、さらに人間の社会生

活や個人の生活、そして我欲の鍛錬、アッラーの恵みに感謝することなどにまつわる英知です

ジャーナブ・ハックのルブービーヤという点における断食の数多くの英知のうち一つは、次のようなものです。

ジャーナブ・ハックが地上を恵みの食卓として創造され、あらゆる種類の恵みを

مِنْ حَيْثُ لَا يَحْتَسِبُ

という形でその食卓に並べられたという側面から、そのルブービーヤ（教えられるお方としての特質）の完全性、ラフマーニヤ（アッラーがすべての被造物に慈悲を持たれること）、ラヒーミーヤ（あらゆる被造物に現れるアッラーの慈悲深さ）をその状態で示しているのです

人間は不注意さの覆いの下で、要因が重視されるこの世界で、その状態が示している真実をきちんと見ることができず、時には忘れていきます。神聖なるラマダーン月を迎えると、信仰する人々は突如として秩序のとれた軍隊のようになります。スルターヌ・アザリーの宴に招待された人のように、夜が近づいてくると「さあ、どうぞ」という命令を待っているかのようにしもべにふさわしい態度を示すことで、この慈悲深く威厳のある、そして包括的なアッラーの慈悲に対し、広く崇高な、そして秩序のとれた形でのしもべとしての行為で応えているのです。このような崇高なしもべとしての行為、誉れ高い任務に参加しない人は、人間という名にふさわしいのでしょうか？

第2のポイント

神聖なるラマダーンのサウムの、ジャーナブ・ハックの恵みへの感謝という面からの多くの英知のうちの一つは次のようなものです。

第1の言葉で述べられたように、一人の給仕が、皇帝の台所から運んでくる料理には、一定の値段が付けられています。給仕にチップを払い、このとても貴重な恵みを価値のないものと考え、彼に恵みを与えられたお方のことを知らずにいることは、この上ない愚かしいことです。またジャーナブ・ハックはあらゆる種類の恵みを人間のために地上にもたらされ、それに対して恵みの対価としての感謝を求められています。その恵みの外見上の要因、理由は、給仕のような意味を持ちます。私たちは給仕にお金を払い、彼らに恩義を感じます。さらに彼らにふさわしいものよりも多くの敬意と感謝を示します。しかしムニーミ・ハキーキはそれらの要因よりもずっと、その恵みのための感謝にふさわしいのです。そう、そのお方に感謝することは、それらの恵みがお方からのものであると知ること、その恵みの尊さを評価すること、その恵みへの自らのニーズを感じることで可能となります。

そう、聖なるラマダーン月における断食は、真の、純粹な、崇高な、そして普遍的な感謝の鍵です。なぜなら断食月以外の時には、困窮していない人々の多くは真の意味での空腹を感じないゆえに、多くの恵みの価値がわからないからです。特に満腹し裕福である人が、乾いたひとかけらのパン（恵み）の段階は理解されません。しかしイフタルの時間には、その乾いたパンは信者の目に非常に尊いアッラーの恵みとなることを味覚が証明しています。神聖なるラマダーンには、皇帝から最も貧しい人までの全員が、恵みの

価値を理解し、心から感謝するのです。

また日中に食事をとれないことから、「あの恵みは私のものではない。私はこれらの消費において自由ではない。つまり他者のものであり、恵みなのだ。私はそのお方の命令を待っている」と考え、恵みを恵みと知り、心から感謝するのです。

このように断食は多くの面で人間の真の任務である感謝の鍵という意味を持つのです。

第3のポイント

断食の、人間の社会生活の面からの多くの英知のなかの一つが、次のようなものです。

人間は経済的に、様々な形に創造されています。ジャーブ・ハックはそうした社会的格差に対し、裕福な人びとを貧者への援助へと招きます。裕福な人びとは、断食を行うことによって貧しい人びとの置かれている困難な状況、空腹を完全に理解することができるのです。断食がなければ、自分の我欲に固執し、空腹や貧困がどれほどつらいものであるか、いかに慈しみを必要としているかを理解できない裕福な人々がたくさんいたことでしょう。この点における人間の、同じ人間への慈悲は、真の感謝の基盤です。誰であれ、自分よりもある意味でさらに貧しい人を見出すことはできるでしょう。彼はその人への慈悲という責任を負うのです。もし、自分の自我を空腹に耐えさせる必要がないのなら、慈悲によって行う責任を負う寄付や援助を行うことはできないでしょう。行ったとしても完全には行えないでしょう。なぜなら、彼らの真の状況を自らの自我で感じてはい

ないからです。

第4のポイント

神聖なるラマダーン月における断食の、自我の鍛錬という観点からの多くの英知のうちの一つは、次のようなものです

自我は、自らが自由で解放されていることを求め、またそのように理解しています。さらに、空想上の支配や、全く自分の願いどおりに行動することを本質として求めます。無限の恵みによって育成されていると考えることを好みません。特に、この世界で富や力を持っており、不注意さまでもがその助けとなるのであれば、まさに貪欲に、欲望のままにけものののようにアッラーの恵みをむさぼるようになってしまうのです。

そう、神聖なるラマダーン月では最も豊かな人から最も貧しい人まで、あらゆる人の自我は次のことを理解します。すなわち、自らは所有者ではなく下僕であり、自由ではなくしもべであるということです。命令が下らなければ最もありきたりで最も容易なことすら行うことはできず、その手をあれやこれやに伸ばすことはできないのです。そうして空想上の支配は崩され、アッラーへのしもべとしての行為を行い、真の義務である感謝を行うようになるのです。

第5のポイント

神聖なるラマダーン月の断食は、我欲の悪い性質を取り除き、反抗的な行動を断念させるという観点からも多くの英知を含み、その一つは次の通りです。

人の我欲は不注意さによって我を忘れます。その本質にある限りのない弱さ、終わりのない無力さ、大いなる欠点を見ることができず、また見ることを望みません。またいかに弱く、また消失を運命づけられているか、災いの標的となるかを、そして簡単に損なわれ腐ってしまう肉と骨でできていることを考えません。あたかも鋼鉄製の体を持っているかのように、不死身であるかのように、自らを永遠であると妄想するかのようにこの世界を攻撃します。強い欲望や貪欲さ、強い愛着や愛情を持ってこの世界に飛び込みます。あらゆる快楽や、利益をもたらす事柄に夢中になります。自らを完全な慈悲で鍛錬されるハールクを忘れ、そして自らの生涯の結果や来世を考えられなくなります。悪い道徳の中でのたうちまわるのです。

そう、神聖なるラマダーン月の断食は、最も不注意な人々、頑固な人々にも、その無力さ、弱さを感じさせるのです。空腹を通して自らの胃について考えます。胃のニーズを理解します。弱い肉体がいかに脆いものであるかを思い出します。自らがいかに慈悲、慈愛を必要としているかを理解します。我欲が自らを神のように思い込むことを断念し、完全な無力さ、弱さと共にアッラーの御前へと庇護を求めたいという欲求を感じ、精神的な感謝という手で、慈悲の扉をノックしようと備えるのです - もし、不注意さがその心を損なってしまっていなければ！

第6のポイント

神聖なるラマダーン月の齋戒の、クルアーンの啓示という観点からの多くの英知、そしてラマダーンがクルアーンの最も重要な啓示の時であるという点からの多くの英知のうちの一つは、次のようなものです。

クルアーンはラマダーン月に下されました。クルアーンの啓示の時に備え、その啓典をよい形で迎えるために、ラマダーン月において我欲の低俗な欲求や意味もない事柄から清められ、飲食を放棄することにより、天使たちの状態に似ること、ある意味でクルアーンが新しく啓示されているかのように読み、聞き、そこにおけるアッラーの呼びかけをあたかもそれが下された瞬間に聞き、またその呼びかけを預言者ムハンマドが我々になさってくださいるかのように聞いているような、あるいは天使ジブラーイルから、あるいはムテケッリミ・アザリーから拝聴しているような神聖な状態に到達します。そして自らが通訳となり、他者にも聞かせること、クルアーンの啓示の意図をさらに示すことにもなるのです。

そう、神聖なるラマダーン月にイスラーム世界はあたかも一つの礼拝所のようになります。何百万人ものハーフズたちがあちこちの大きな礼拝所でクルアーンを、天からの呼びかけとしてこの世界の住民に聞かせています。毎年のラマダーン月は、

شَهْرُ رَمَضَانَ الَّذِي أُنْزِلَ فِيهِ الْقُرْآنُ

というクルアーンの言葉を、光に満ちた輝かしい形で示します。ラマダーンがクルアーンの月であることを証明します。その大きな集団の人々は、その一部が畏怖の中でハーフズたちを聞いており、残りは自らでそれを読んでいます

このような状態にある神聖な礼拝所において、低俗な事柄を求

める我欲のはかない欲求に従い飲み食いをする
ことでこの輝かしい状態から離れることがいかに醜
く、また礼拝所にいる集団の憎しみの対象となる
ものであれ、神聖なるラマダーン月に断食を行う
人々に対立する人も、同じくらい全イスラーム世
界の精神的な憎しみや侮蔑の対象となるのです。

第7のポイント

ラマダーン月の斎戒は、来世のための収穫や取
引を行うためにこの世界に来た人間の利益という
観点からも多くの英知を備えています。その一つ
は次のようなものです。

神聖なるラマダーン月における行いの報償は千
倍になります。クルアーンはハディースによる判
断によるとそれぞれの文字に10の報償がありま
す。10の善行と見なされ、10の天国の果実をもた
らします。ラマダーン月ではそれぞれの文字は10
ではなく千の、アーヤトウル・クルシーのような
章句であればそれぞれの文字が何千もの報償を持
ち、さらにラマダーン月の金曜日ではそれ以上と
なります。カディルの夜には3万の善行と見なされ
ます。そう、それぞれの文字が3万の永遠の果実
を与えるクルアーンは、実に輝かしい天国の木の
ようであり、何百万ものその永遠の果実を、ラマ
ダーン月に信者たちに獲得させるのです。さあ来
てください、この神聖な、永遠の、そして利益の
多い取引を見、眺め、考えてください。文字の価
値を認めない人がどれほどの限りのない損をして
いるのかを理解してください。

神聖なるラマダーン月は、あたかも来世の取引
のための非常に益の多い展示場であり、市場のよ
うなものです。来世で収穫す

#17 るための豊饒な大地なのです。そして行いが成長を遂げるための春の、4月の雨のようです。アッラーのルブービーヤによる統治に対し、人間の崇拜行為やしもべとしての行為がパレードを行う、最も輝かしく神聖な祭りです。だからこそ、飲食のような我欲の不注意さによって動物的なニーズや無意味で貪欲な快楽を追わないよう、断食という義務を負わされたのです。一時的に動物的な状態を離れ、天使のような状態になり、あるいは来世の取引を行っているため、世俗的なニーズを一時的に放棄し、来世の人、肉体から離れた魂という状態になり、斎戒によってサマダーニヤの一種の鏡となるのです。

そう、神聖なるラマダーン月は、このはかない世界で、はかない生涯で、短い人生で、永遠の生命、長く終わりのない命を獲得させます。そう、一回のラマダーンは80年分の果実を獲得させます。カディルの夜がクルアーンの明証によって千の月よりもなお尊いものとされていることがこの神秘の確定的な証拠です

皇帝は皇位についている期間中、おそらくは毎年、その王位継承を記念してあるいはその他の、その壮大な領土にふさわしい日を祝日とします。住民をその日、法に従った形ではなく、むしろ特別な恵みとして直接自らの近くに、特別な言葉と驚くような振る舞いと共に呼ばれ、それにふさわしい誠実な住民と特別な関わりをもちます。同じように、アザル、アバドゥ・スルタンである1万8千の世界のパーディシャーフ・ズルジャールは、その1万8千の世界に向けられた誉れ高き勅令であるクルアーンを神聖なるラマダーン月に下されたのです。当然このラマダーンが特別なアッラーの祭日であり、ラッバーニの展示であり、魂の集う場であるということは、アッラーの英知が要するものなのです。

ラマダーン月はその祭日です。当然、低俗で動物的な雑事から人々を遠ざけるため、断食が命じられるのです。そしてその断食のより完全なものとは、胃と同じようにすべての感覚、目、耳、心、想像、考えといった人間の持つ身体器官にも、ある種の断食を行わせることです。つまり、禁じられた事柄から、無駄であることから遠ざけること、それぞれに固有の崇拜行為を行わせることです。例えば、舌を嘘、陰口、下品な表現から遠ざけることによって断食をさせること、舌をクルアーンの読誦やズィクル、賛美や祝福祈願、悔悟といったものに用いること、目が禁じられている異性を見ることが、耳が悪いことを聞くことを禁じ、目を教訓へ、耳を正しい言葉やクルアーンを聞くことへと導くというように、他の器官にも一種の断食をさせることです。そもそも胃は人間の身体最大の工場であり、断食によって胃に休みを与えることができれば、他の小さな器官も容易にそれに従うことができるのです。

第8のポイント

神聖なるラマダーン月の、人間の個人的な生活の観点からの多くの英知のうちの一つは、次のようなものです。

人間にとって最も重要な薬の一種が物質的・精神的な食事療法です。医学的な食事療法でもあり、飲食における人の我欲は気の向くままに行動することはその人の肉体に医学的な害を与えると同様に、ハラールとハラームの区別もせずに手当たり次第の物をむさぼることは、その人の精神をも害するものとなります。心や魂に従うことは我欲によって困難となり、反抗的にその手綱を奪います。人はもうそれに乗ることはできません。それが人に乗るようになります。

神聖なるラマダーン月では、断食を通して一種の食事療法に慣れ、禁欲に努め、神の命令に耳を傾けることを学びます。能力に限りのある胃に、消化する前にさらに食べ物を詰め込むことで病気を引き起こすこともなくなります。そして命令を通して許されたものをも放棄することで、禁じられたものを避けるために理性や法からもたらされる命令を聞くという能力を獲得します。精神生活を損なわないよう努力します。

また人の多くは空腹にしばしば慣れます。忍耐、心を培う訓練となる空腹や食事療法を必要とするのです。ラマダーン月の断食は一日15時間、サフルを行わない場合は24時間続く空腹の時間によって忍耐、心を培う、食事療法、訓練なのです。すなわち人間の災いを二倍にする忍耐不足、耐久心のなさのための一つの薬が、断食なのです。

胃という工場には多くの奉仕者がいます。すなわち胃に関わりのある多くの器官があります。我欲はもし一時的に、一カ月の間。日中の休息を与えなければ、その工場の奉仕者やその器官の特有のイバーダをそれらに忘れさせ、自らにばかり関わらせ、その影響下に置きます。その他の器官も、その精神的な工場の歯車からの騒音や煙のせいで混乱するようになります。注意深いまなざしをいつでも自分にだけ向けます。崇高な任務を一時的に忘れます。だからこそ、昔からアッラーの友である人たち（聖人たち）が成熟のため、食事療法や飲食を減らすことに自らを慣らしてきたのです

しかし神聖なるラマダーン月の断食によってその工場の奉仕者

私たちは、自分たちがただその工場のためのみに創造されたのではないことを理解します。そして他の器官は、その工場の低俗な楽しみの代わりに、ラマダーン月には天使の位階の、あるいは魂の世界に関わる楽しみを味わい、そのまなざしをそれらに向け、そのため、ラマダーン月では信者たちはその位階に応じたそれぞれに異なる光、恵み、精神的な喜びに到達します。心と魂、知性、神秘といった細やかな感覚もその祝福された月には、断食を通して大きく発展し、糧を得ます。胃が泣いている一方で、それらは無垢な状態で微笑むのです。

第9のポイント

神聖なるラマダーン月の断食は直接、我欲の妄想上の統治を崩し、弱さを示し、しもべであることを告げるという点でも多くの英知を秘めています。そのうちの一つは次のようなものです。

我欲は、そのラップを知ることを求めません。フィルアウンのように自らの統治を求めているのです。どれほどの罰が与えられても、その性質は残り続けます。しかし空腹によってその性質は碎かれま。そう、神聖なるラマダーン月の断食は直接、我欲が自らを神であるかのように見なして思い上がることに打撃を加え、打ち碎きます。弱さ、無力さ、困窮さを示し、しもべであることを告げるのです。

ハディースの伝承では次のように説かれています。

ジャーナブ・ハックは我欲に対しおっしゃられます。「私は誰か、あなたは誰か」

我欲は答えます。「私は私であり、あなたはあなたである」

罰が与えられ、地獄に投げ入れられ、再び尋ねられます。我欲はまた「私は私であり、あなたはあなたである」と答えます。どのような罰が与えられても、傲慢さを放棄することはないのです。

それから、空腹による罰が与えられました。すなわち空腹のままにおいておかれたのです。再び「私は誰か、あなたは誰か」と尋ねられました。我欲は答えました。

أَنْتَ رَبِّي الرَّحِيمُ وَأَنَا عَبْدُكَ الْعَاجِزُ

すなわち、「あなたは私のラッビ・ラヒームです。私はあなたの無力なしもべです」

اَللّٰهُمَّ صَلِّ وَسَلِّمْ عَلٰى سَيِّدِنَا مُحَمَّدٍ صَلَاةً تَكُوْنُ
لَكَ رِضَاءً وَ لِحَقِّهِ اَدَاءً بِعَدَدِ ثَوَابِ قِرَاةِ حُرُوفِ
الْقُرْآنِ فِي شَهْرِ رَمَضَانَ وَ عَلٰى آلِهِ وَ صَحْبِهِ وَ سَلِّمْ
سُبْحَانَ رَبِّكَ رَبِّ الْعِزَّةِ عَمَّا يَصِفُوْنَ وَسَلَامٌ عَلٰى
الْمُرْسَلِيْنَ وَ الْحَمْدُ لِلّٰهِ رَبِّ الْعَالَمِيْنَ اٰمِيْنَ

お詫び：この部分の文章は40分という速さで書かれたものであ

#22

り、私と最初の版を書いた書記の両方が病気であることから当然、整っていない部分や不足が存在するでしょう。兄弟たちが寛容のまなざしで見てくださることを望んでいます。必要と思った部分を修正してもらっても構いません。